

大学体育におけるフットサルの指導に関する一考察 — 男女共習型授業の実践を通して —

大島 寛

A Study on the Futsal Classes in University Physical Education Activities — Based on Teaching Experiences of Co-Educational Classes —

Hiroshi Oshima

1. はじめに

大学体育の授業では男子のコース、女子のコースという指定は、ほとんどの大学でなされていないのが現状である。しかしながら、中学・高校の体育では、男女間の性、体力、体格、運動能力差を理由に、ほとんどの学生が男女別で授業をおこなってきており、男女共習型の授業を受講することは初めてである場合が多い(八代, 2004)。男女共習型の授業は男女にかかわらず、個人の能力や可能性を尊重し、それぞれの良さを発揮して生きていくためにはどうすればよいかを考える実践的な場となり、その意義は大きいと思われる(北田, 1999)。

しかしながら、男女共習型の授業を展開するには、体格・体力差のある男女学生がケガをせずにスポーツを学び、ゲームを楽しむことに留意しなければならない。また、ボール運動のように動きの激しい種目は、ゲームになると速い動きが伴い、男女混合のチーム編成では男子学生が中心にゲーム展開する場面が多い。

このことは、これまで男女共習型の授業の経験の少ないことやほとんどのスポーツ種目で男女混合型を持つ競技が見受けられないからであると考えられる。体格・体力差を配慮する中で男女学生がそれぞれの役割を考え、ゲームプランを立てること(北田, 1999)や必要に応じて独自のルールをつくることは、新たな授業展開の発見や教材研究にもつながる(高田, 1979)(中村, 1983)。

そこで男女学生がケガをすることなく生き生きとスポーツ活動に取り組み、ゲームを通じて新しい仲間をつくることは、大学体育の役割のひとつであると考えられる。

これらのことをふまえ、平成17年から平成19年までの3年間、フットサルの授業を選択した男女共習型のクラス(男子学生77.8%女子学生22.2%)での授業展開における方策と問題点を明らかにし、その実際を報告する。

2. 教材としてのフットサル

フットサルは、南米を中心に発展してきたサロンプルットボールとイギリスから始まったインドアサッカーが融合し、1994年よりルールが統一化された競技である。コートの大きさは、縦38-42m×横18-25m。ゴールは、高さ2m×幅3m×奥行き1mである。フットサル用のボールは、外周62cm~64cm、2mの高さから落下させた時の最初のバウンドが50cm~65cmで4号球ローバウンドのものをを使う。

競技者は5人で、そのうち一人はゴールキーパーである(交代要員は最大7人まで)。実際のゲームは前後半の20分の計40分で行われる(前後半1回ずつ1分間のタイムアウト)。フットサルとサッカーの違いは、交代が自由に何回でもできることであり、一度交代した選手は再びプレーできないサッカーと異なる。

また、キーパーはゴールキックを行わずスロー

インで行い、一度相手が触れるか、ハーフウェイラインを超えてからでないと、キーパーは一切ボールに触れられない。タッチラインでのプレーの再開はキックインで行う。フリーキック、キックイン、コーナーキック及びゴールクリアランスは全て4秒以内に行わなければならないなどのルールが特徴である。

フットサルゴールの高さと幅は、ハンドボールゴールと同じであり、コートも代用できる。ボールはローバウンドのものを使うためサッカーボールよりも頭部付近、特に顔面接触などの危険性は低いと考えられる。このことから、サッカーと比較しても男女共習型の授業を展開する上で、教材として取り上げやすい種目である。

3. 男女混合ゲームのルール作り

男女共習型の授業を展開する上でどのような問題が起こるかを明確化するため、はじめに試しのゲームを実施した。

最初の授業では、男女共習で学びゲームを楽しむことの意義を説明した後、フットサルのルールの理解と浮き球やロングシュートで起こりうる危険な状況を解説し、安全面の注意を行った後、男女混合（男子4名、女子1～2名）のチーム編成でゲームを実施した。

ゲーム終了後、学生の感想を集約。いくつかの課題行動と問題点を明らかにし、以下の6項目にまとめた。

- ① 経験のばらつき
- ② 浮き球やロングシュート
- ③ 有効な声
- ④ ボール回しの技術
- ⑤ ゲーム展開のイメージ
- ⑥ 体格・体力差に対するアドバンテージ

これらの6つの課題行動や問題点を男女混合チームでゲームを行う上での注意点として話し合い、男女共習でよりゲームを楽しむことのできるルール作りを具体的にいった。

①については、サッカー経験者を均等に分けることで合意。

②の浮き球については危険回避の観点から腰から上の高さのボールは出さないこと。ロングシュートは、細かいボール回しに慣れることによる未経験者の技術向上を重要視するため禁止とする。このためセットプレーでのヘディングシュートは禁止。また、ゴールも腰から上は禁止としたためゴール横に高さ70cmのカラークォーンを設置。

③については、サッカー経験者を均等に分けたことで、サッカー経験者がリーダーシップをとり、有効な指示を出してチームの士気を高める。

④については、つま先や足の裏、足の内側を使うボール慣れをゲーム前に各チームが毎週実施して技術向上を図る。

⑤については、前に攻めるだけでなく、バックパスやサイドチェンジを有効に使うこともイメージとして持つように心がけることとそれに伴うボール回しの練習を各チームで行う。

⑥については女子が得点した場合は2点とし、女子同士の接触プレーのみ有効。男子が接触した場合はフリーキック。

また、数多くゲームをするために審判は置かずにセルフジャッジでゲームを行うこととした。セルフジャッジで判断できない場合はプレーを中断してキャプテン同士で話し合うこととした。

4. 実際のゲーム展開と特別ルールの設定

ところで、男女共習授業で学び、ゲームを楽しむためには、各グループの学生が浮き球やロングシュートで起こりうる危険な状況を理解し、サッカー経験のほとんどない女子学生への安全面に対しての配慮を十分にしなければならない。そこで、この女子学生への配慮方法を具体化するために学生との話し合いで作成されたルールを適用し、各グループのサッカー経験者がリーダーとなり、男女混合チームのリーグ戦を実施した。

リーグ戦を実施した結果、各グループともゲーム展開では有効な声でチームをリードする場面が見られたが、女子学生のゲームへの取り組みが消

大学体育におけるフットサルの指導

極的で触球回数が少ないことが目立った。そこで女子学生のゲームへの積極的な取り組み、触球回数の増加を促すために、以下の特別ルールを追加し、ゲームの中に取り入れた。

①案「男子は女子にしかパスできないが女子は男女どちらにパスしても良い」

このルールは女子が2名入る場合は女子の触球回数が増えることに有効であるが、男子はドリブルでなければ攻め上がることができないためボール回しを目標とする場合は効果的ではない。一方、女子が1名の場合は女子への負担が大きすぎ、ゲームが単調となった。

②案「全員がボールに触れなければシュートできない」

全員がボールを回している間に相手に奪われた場合は、もう一度初めからパス回しをしなければならない。相手のボールを奪っただけではパス回しをカットしたことにはならず、味方にパスをつながなければ相手カウントをゼロに戻すことはできない。奪ったボールを味方につないだ時点で2人が触れたことになり、残りのプレーヤー全員がボールに触ればシュートができる（最後に触れなければならないプレーヤーがシュートしても良い）。

このルールはボールコントロールの技術と声による有効な指示が必要になるため、本来のルールでゲームをする前のミニゲームとして実施することが大変有効であることがわかった。そして、チーム編成でクラス全体を均等に分けられない場合でも全員がゲームに参加してプレーすることができるという意見もあった。

例えば、6人のチームと5人のチームがそのままコートに入って対戦しても人数の多いチームは1人多くパスを回さなければならないので、人数のアドバンテージはミニゲームとしてはあまり気になるものではない。そのため、ゲーム前のボール慣れやウォームアップの1つとして有効であると判断した。

5. ミニゲームからリーグ戦への授業展開

女子学生のゲームへの積極的な取り組みを促すためのルールを各グループの意見を参考に考える中で「全員がボールに触れなければシュートできない」という特別ルールによる新たなミニゲームが発案された。このミニゲームは、ボール慣れやウォームアップとしても有効であると判断し、リーグ戦に入る前に実施した。

特別ルールによるミニゲームを、以下の3つの形式で試みた。

- ① 全員タッチ
- ② 4人タッチ（必ず女子は触球）
- ③ 3人タッチ（必ず女子は触球）

上記のミニゲームではボールに触れていないのは誰かを確認しなければならないのでリーダーの声による指示や全員の触球確認が必要になった。このことは、シュートして良いときの「OK」の合図や相手のボールを奪って味方にパスを回した時の「チャラ」という合図など、その場で発案された合図としての言葉は、チーム内のコミュニケーションとチームの士気を高めるのに効果的であり、また、リーグ戦を行う前の練習として十分に活用でき、チーム作りやコミュニケーション作りにおいて有効な方法であると感じられた。

ミニゲームの後、以下のルールを追加確認し、試合時間7分のリーグ戦を実施した。

- ・女子が得点した場合は2点。
 - ・接触プレーは女子同士のみ有効で、男子が接触した場合は間接フリーキック。
 - ・ゴールは、ボールが完全に70cm以内におさまっていないなければならない（ゴール横の高さ70cmのカラーコーンを目安に判断する）。
- 以上のルールでリーグ戦を展開した。

6. 視聴覚教材の活用

屋外で実施するフットサルの授業は、雨天の場合、グラウンドの使用は不可となる。雨天時の授業は、特別ルールによる授業展開を振り返ったり、

新しい課題を見いだしたりするための有効な時間と考えられる。

雨天時の授業では、グループごとに、これまで行ってきたゲームの反省とルールの再確認を行い、ゲーム展開のイメージ作りができるよう視聴覚教材を使った戦術面の学習を行った。参考になる練習方法を説明し、コートの中をどのように動き、攻撃に結びつけるのかを考え、ボールを持つプレーヤーとサポートするプレーヤーのポジションの取り方を各チームで話し合った（図1）。

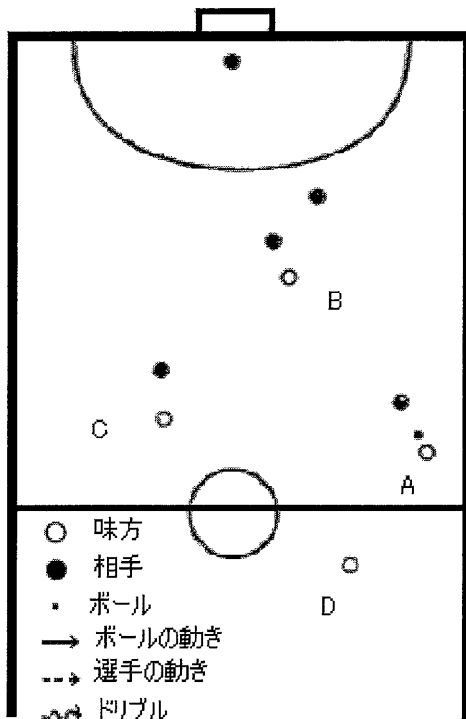


図1 戦術ボード（例）

たとえば、サイドでプレーヤーAがボールを持っている場合、後方のプレーヤーDがボールを受ける。プレーヤーCは、左方向に移動して作ったスペースに、プレーヤーDがドリブルで攻めることや、プレーヤーBに縦パスを出してリターンを受けてシュートするなど、4人のポジションと役割を決定し、誰がゲームをコントロールするのかなど、戦術を考える機会を与えた（図2）。

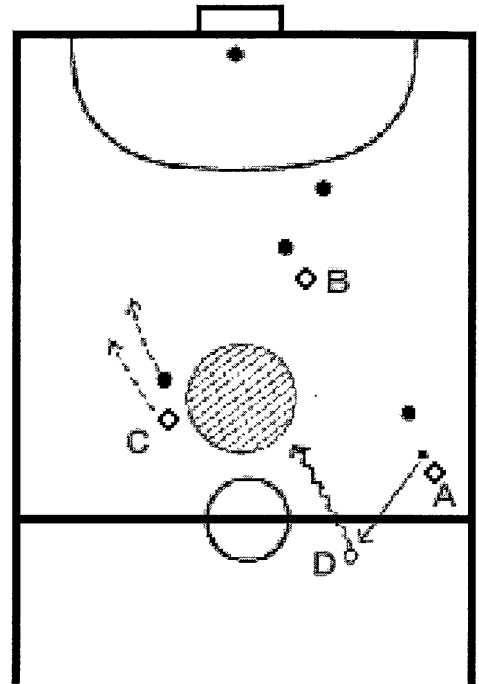


図2 攻撃スペースの作り方（例）

代表的な4つのフォーメーションを説明し、ボールの位置やプレーヤーの動きによって自在にフォーメーションを変形させていくことを学習した。また、これらのフォーメーションは、攻撃と守備の両方に使うことができるため、各チームがゴールキーパーの役割も含めて、攻守の戦術理解を図った（図3）。

- ① トップに1人、両サイドに1人ずつ、そして後方に1人が位置するダイヤモンド型。
- ② 前に2人、後に2人のボックス型。
- ③ 前3人、後1人のT字型。
- ④ 前1人、後3人の逆T字型

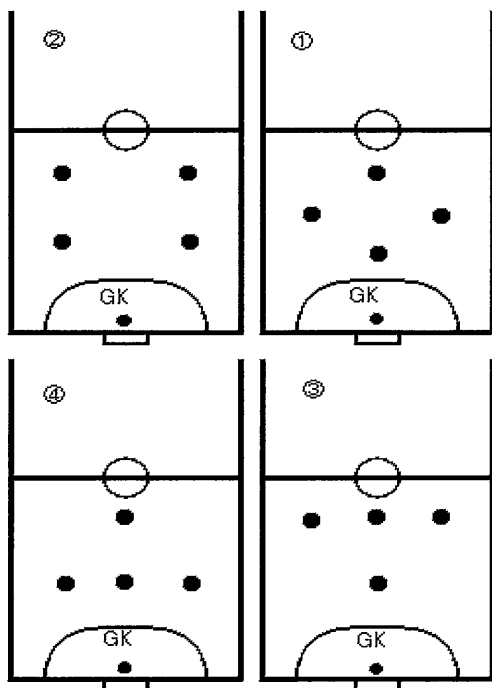


図3 フットサルの基本的な攻守隊形

7. まとめ

現在までのサッカー経験を尋ねると、男子学生は中学・高校の授業でサッカーを経験しており、クラブ活動経験者もいる。しかしながら、女子学生はほとんどが未経験者である。このようにサッカー経験においては全く対局の関係の中にある男女共習型の授業をどのように展開していくかを工夫する時、男女が思いやりの気持ちを持ちながら「教え・教わる」というお互いのコミュニケーションを図りつつ、技術・技能を高めることではないかと考えた。

筆者は自らの教育実習の際、当時筑波大学付属高等学校の教員であった中村先生に「できる」と「わかる」ことの関係（中村, 1983）の四つの類型を直接ご教授いただいた。フットサルの授業を展開していく上でも、中村の示唆は考えるヒントとなった。たとえば、サッカー経験者でもサッカー技術は優れているがグループをまとめ指

導することができるかと言えば、必ずしもそうではない。「できるが、わかっていない」サッカー経験者と「できるし、わかっている」サッカー経験者ではグループに対する「指導の丁寧さ」に違いが見られた。また、「できるし、わかっている」サッカー経験者のチームは、比較的早い時期からサッカー未経験の女子がゲームで機能するようになった。一方、「できないが、わかっている」学生は、ゲームを作っていく上での有効な声を出すことができたようになったが、「できないし、わかっている」学生をどのように引き上げるかが課題として残された。このように、ゲームの勝敗に価値を置くなら「できる」だけで構わないのであろうが、フットサルを教材としてグループ学習に取り組む場面では、四つの類型を参考に学生の授業運営を観察することは興味深いテーマであると感じた。これらは、筆者のこれまでの経験に則した観察でしかないが「できる」と「わかる」ことの関係の議論の題材になればと考える。

自己表現やコミュニケーションの手段も携帯電話やパソコンの普及によって間接的なものに変容している。その中で大学体育の授業においては、教材を通して身体表現をしたり、身体を通じて他者とのコミュニケーションをとったりする場を提供している。普段あまり顔をあわさない男女の学生同士が、スポーツを通じてコミュニケーションを図り、仲良くなっていく様子は、大学体育の持つ醍醐味であると再認識した。

男女共習型のフットサルの授業の中で、それぞれが個人の能力や可能性を尊重し、安全性を考慮しながらゲームを学び楽しむために、男女混合ゲームのルールを学生とともにいろいろな角度から考案し、そのゲームを通じて技術・技能の向上を図る形式を実践した。毎時間行われるリーグ戦で反省材料を見つけ、次の課題として授業を展開する中で、メンバー同士が協力し合って得点に結びつけたり、セットプレーを成功させたりすることは、問題解決能力を養う格好の場となった。

今後も男女間の体格・体力の差を配慮する方法的側面と組織的側面に着目し、それぞれの可能性

や個性を発揮するための授業改善を課題として、
男女共習型の授業に取り組みたい。

文献

- 萩原武久（1980）楽しいサッカートレーニング
不昧堂出版 pp113-127
- 北田和美（1999）男女共習体育授業の課題 大阪
女子短期大学紀要 24：27-33
- 松崎康弘、須田芳正（2002）フットサル教本 大
修館書店
- 中村敏雄（1983）体育実践の見かた・考えかた
大修館書店 pp188-196
- 高田典衛（1977）体育授業の方法 杏林書院
pp1-22
- 高田典衛（1979）体育授業の改造 杏林書院
pp70-78
- 八代勉（2004）選択制の男女共習の根拠 体育科
教育法講義 大修館書店 pp198-203